藤壺宮出家とその意味

広川勝美

1

「源氏物語」には、多数の出家者、あるいは出家するに至らないまでも、その願いをもっていた者たちが登場する。しかも、それら求道者たちの大半は、物語全体において主要な役割を与えられているのである。これは「源氏物語」の世界の構築に仏教思想がかなりの位置を占めていることのあらわれである。この場合、仏教思想は、ただ単にこの物語の時代の思想的宗教的状況の反映としてあるだけではない。それはまさに、物語の世界を成り立たせ、それと切り結んで生きていく人間、他ならぬ求道者たちの生き方の問題にかかわっている点において、積極的な意味をもっていることが認められるのではなかろうか。この時代に存在した「西方願生者が持つ、人間的な苦悩の深さが、その様な文学的追求を誘う原因ともなった」[註1]のであろうが、それはまた同時に、作者そのものが求めつづけていた人間救済を探り出す方途でもあった。紫式部はその日記の随所に出離の願いを表明し、求道心ゆえに現実に没しきれぬ内心の苦悩を記しているのである。紫式部の仏教思想への志向もまた当時の求道者たちと同じく、自らの人間性解体の悲哀と、それを余儀なくさせた藤原貴族社会の現実に対する失望、批判を基底として形成されていったとみられる。そして、そのような状況からの脱却を時代の中心的な思想であった仏教によって得ようとしていた。しかし、そうはいっても、人間が仏道によって救いとられることがいかに容易でなかったかは、日記がなお苦渋をもって終わっているところから認められる。そしてまた、文学の方法による全き人間性の追求そのものが、宗教的人間救済と必ずしも一致するものではない。むしろ、対立矛盾する側面さえもっていると思われる。それは「源氏物語」に登場する求道者たちの多くがなお此岸、彼岸にまたがりつつ、その両極をたゆたい漂泊していることにもみられる。作者は、

人間救済をめざして仏道精進の心をかためる反面、自らの文学的営為の帰結の全てを仏教に託すことができず、執拗にこれを凝視せざるをえなかったと考えられる。あるいはその自己凝視のうちに、人間社会の現実に生きる新たなる生が見出されるのかも知れない。それこそが文学としての「源氏物語」の負うべき課題であろう。そして作者はそれにこたえる営みの中核に他ならぬ求道者たちを据えたのである。とすれば、「源氏物語」に描かれた求道者たちの仏道への歩みのありさまを解きほぐすことによって、紫式部の文学と仏教思想のかかわりかた、ひいては「源氏物語」の本質と構造とが明らかになるのであろう。

本稿では、「源氏物語」の前半に描かれる出家者であり、しかも、物語の構成にとって重要な意義をもっていると考えられる藤壺宮の出家に至る過程とその意味とをみきわめたい。いうまでもなく、藤壺宮は、光源氏との密通事件によって、女三宮、さらに浮舟へと引きつがれていく悲劇性、すなわち、「源氏物語」を貫流する主題ともみるべきものの端緒を形成するものとして造型されている。しかも、その出来事ゆえに出家したとされているのである。のみならず、仏道への歩みは女三宮・浮舟も同じくまた示していることである。たしかに、「女性にとっては、恋愛生活に基づく悲歎が、この世を憂きものと思い込むに至った」[注2]という事情は、これらの場合にもあてはまるけれども、はたしてその結果、「現実的な愛の苦悩と破綻は出家といふ仏教的営為を通して肯定の世界に入るのである」[注3]と言い切れるのかどうか。そして、「源氏物語」の方法が、仏教帰依に到達することのうちに終わっているのかどうか。そこにはなお文学と仏教との微妙なくいちがいはないのか。まず、藤壺宮の出家の実態についてみる必要があろう。

註1　柳井滋「思想的背景としての仏教」（国文学解釈と鑑賞三〇年七月所収）

2　竹野長次「源氏物語論考」

3　実方清「悲劇的女性としての藤壺」（国文学解釈と鑑賞二四年八月所収）

尚、以下の本文引用は、池田亀鑑校註「源氏物語」（日本古典全書）による。

2

藤壺宮は桐壺更衣の運命づけられていた悲劇的な生涯とその結末としての死との哀愁が漂い残っている物語の舞台に姿を現わす。

「先帝の四の宮の、御容貌すぐれ給へる聞え高くおはします。（略）亡せ給ひにし御息所の御容貌に似給へる人を、三代の宮仕に傳はりぬるに、え見奉りつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとよう覚え

て生ひ出でさせ給へりけれ。ありがたき御かたち人になむ』と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねんごろに聞えさせ給ひけり。」

ここにすでに、藤壺宮が描かれることの契機が知られる。身に余る寵愛を受け、一子光源氏の出生後に身を滅ぼしていった桐壺更衣に代るものとして造型されているのである。藤壺宮は桐壺更衣の身代りとして入内したけれども、形代というには、実のところ、「源氏物語」における藤壺宮の位置は、桐壺更衣のそれに比してあまりにも重い。後に藤壺宮と光源氏との間に起こった密事は、それがいかなる意味をもつかは以下に考究しなければならないが、「源氏物語」全巻の構想上の重大な基本点であるといえるのではなかろうか。桐壺更衣は、その死にまで追いつめられた生涯によって、光源氏に亡き母への思慕の情をもたらし、さらに、自らの身代りとしての藤壺宮の資質の根幹をも規定した。そして、両者の決定的な出合いを可能にするために必然的に死ぬべく構想されていたとみられる。つまるところ、「源氏物語」の前史を生きた桐壺更衣を中軸にして、光源氏と藤壺宮とをめぐる物語がそれ以後に展開するのである。物語の女主人公にふさわしく、藤壺宮は身分においても「先帝の四の宮」とされる。桐壺更衣が出自ゆえに宮廷社会に安住しえなかったのに対して、藤壺宮はその社会の中心に身を置く資格を有していたことになる。そのことによって、藤壺宮は、物語の男主人公「光君」に並び立つことのできる「かがやく日の宮」たりうるのである。したがって、桐壺更衣と藤壺宮がともに悲劇的人物であるとしてもその悲劇性は同一ではない。桐壺更衣の悲劇は宮廷社会の現実に耐えることができなかったという社会的条件に主な原因がある。それに対して、藤壺宮の悲劇は根本的には桐壺更衣と同様に貴族社会の現実に規定されてはいるが、どちらかといえば、理性と良識が抑えようとしながらついに源氏との関係を避けえなかったことから生じる内面の葛藤と苦悩に重心がある。「源氏物語」の主題もそのことにかかわっていると考えられる。

「源氏物語」を語るにあたって、亡き母桐壺更衣を偲ぶ光源氏と、その更衣の身代りとして父帝のもとに入内した藤壺宮との出合いを作者は用意していた。

「母御息所も、影だに覚え給はぬを、いとよう似給へり、と典侍の聞えけるを、若き御心地にいとあはれと思ひ聞え給ひて、常に参らまほしく、なづさひ見奉らばや、と覚え給ふ」

と記されていることである。この亡き母への思慕が次第に異性への愛情に移行していくときに、「源氏物語」の悲劇性の根源――苦悩すべき光源氏と藤壺宮との関係が成立するのである。藤壺宮形象の最初からその崩しがこめられていたと考えられる。風巻景次郎氏は、このことについて、

「父帝の宮廷で、光君と耀く日の宮という名で並び輝いた二人が、父帝をうら切る秘密の関係で結ばれるに至ったという、桐壺の巻に於けるテーマの設定は、他の女性群の源氏に対する関係とは、違うのである。そして又、耀く日の宮の源氏に対する関係が他の女性たちとは違うのである。この二人は、はじめから相隔り、相別れなければならぬ人間として設定されている」[註4]

とみている。藤壺宮と光源氏とは求めあってはならないものであり、しかもそれゆえにこそ、禁を破って強烈に引きつけあう間柄にあるべく定められているのである。したがって、帝の「限りなき御思どち」として、「光君」と「かがやく日の宮」という名に世人から並び称えられた二人が、ついにその帝に背いて密通事件をおこすという物語の構想にもとづいて、藤壺宮造型がなされたといえよう。そして、全「源氏物語」の発端である桐壺巻には藤壺宮と光源氏との不幸な結びつきが暗示されているのである。そのテーマの実現の契機を作ったのは他ならぬ帝その人であった。このことにおいて作者は、結局人間というものがいかに自ら知らずして傷つき、あるいは傷つかせる運命に追い込まれていくのかを絶望的に語るのかも知れない。帝は、それがいかなる結果を後にもたらすかを知ることなく、元服前とはいえ光源氏を藤壺宮のもとに伴なうのみならず、

「な疎み給ひそ。あやしくよそへ聞えつべき心地なむする。なめしと思さで、らうたくし給へ。つらつきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも、似げなからずなむ」

とさえもいう。父帝によって光源氏は藤壺宮に接することをえたのである。そして、「幼心地にも、はかなき花紅葉につけても志を見え奉り、こよなう心よせ聞え」たというだけの幼い好意が、光源氏の成長とともに恋情にと変化するところに、藤壺宮との苦悩すべき関係が生じるのである。

「十二にて御元服し給ふ」とともに、もはや、かつてのように容易に藤壺のもとにゆくことは許されない。「大人になり給ひて後は、ありしやうに御簾のうちにも入れ給はず」という、それが当時の風習である。まみえることの困難さが、いよいよ藤壺宮への思いを激しくさせるのである。要するに、「藤壺と源氏とは桐壺帝の御言動が動機となって速進させられ、物の紛れの罪を犯す、あわれな運命に追い込まれたのであった」[註5]し、またさらに、「源氏を藤壺に走らせた他の動機は葵上にもある。葵上は源氏の添い臥として、源氏の元服の日に契ったが、二人の間には相互の個人的な同感もなく、従って精神的な愛も認められなかった」[註6]のである。その葵上のかたくなさがまた藤壺宮に対するやみがたい情をかきたてる。葵上は「すこし過し給へる程に、いと若うおはすれば、似げなくはづかしと思」うばかりで夫たる源氏に親しもうとはしない。そのような

葵上を源氏は、「いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず覚え」て、「心安く里住も」しようとはしない。そして、心のうちには、「ただ藤壺の御有様を、類なしと思ひ聞えて、さやうならむ人をこそ見め」とのみ一途に藤壺宮を思うのである。葵上を疎む心が深くなればなる程、光源氏はますます藤壺宮に心ひかれる。その責任をかならずしも葵上の性格にのみ帰することはできない。葵上と光源氏との結婚それ自体が光源氏の元服に際して、帝が「さらばこの折の後見なかめるを、副臥にも」と勧めたごとく、左大臣と帝・光源氏とを姻戚関係で結ぶための政略上の事柄でしかなかった。葵上がその資質とあいまって光源氏に親しみを示さなかったことを責めるべきではない。むしろ、そこには、女の身にとって不自由な結婚を余儀なくさせられた当時の貴族女性の多くに共通する悲哀が写されているとみなければならない。そして同時に、そのような愛情にもとづかない結婚をせざるをえなかった葵上の所在なさと、それゆえにわが身もまた満たされぬ心情を抱かざるをえなかった光源氏の無聊を語ることによって、それと対照的に、強烈な思慕を藤壺宮に寄せることを止めようのない光源氏の想念を物語は浮び上らせるのである。「幼き程の心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける」という思いが極点に達したときに、用意された光源氏と藤壺宮との関係が現実のものとなるのである。桐壺巻はその道筋の起点を語ったといえよう。そして、後の二条院の造営にあたってもまた「かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばや、とのみ歎かしう思しわたる」という光源氏の尽きることのない藤壺宮への情を記して終っているのである。

「源氏物語」の主題は光源氏と藤壺宮の免れることのできなかった関係を基底とする。といっても、それはひたすら光源氏の側から語られる。いったいに、藤壺宮について物語は直接的具体的に描写することは少ない。むしろ、光源氏の精神の内奥にある確固たる存在として語られるにすぎない。しかし、藤壺宮その人も、決して光源氏の自らに対する情を拒否しているわけではない。「御遊の折々、琴笛の音に聞え通ひ、ほのかなる御声をなぐさめにて」と、ほのかな記述の中に、藤壺宮もまた光源氏に心を寄せ、折にふれてひそかに心を通わせあっていたことがみえるのである。藤壺宮の心の奥はひそかにしか語られなかった。そして、そのひそやかさにこそ、藤壺宮像の要点があるともいえるのである。物語の世界の中心にあって、光源氏の心に鮮やかな影を落し、それをつき動かすことによって、「源氏物語」の全てをその根底から推し進めるものとして藤壺宮はある。光源氏の藤壺宮への尽きぬ思慕が物語の新たな展開を導きだすのである。物語における女主人公の一人、というよりも光源氏をめぐる多くの女性たちの中で、現実に最も大きい場をもちつづ

けた若紫の登場もまた例外ではありえない。若紫もまた藤壺宮の生き写しとしてしか現われることはできない。藤壺宮が光源氏にとって消すことのできぬ永遠の理想の女性像であったとすれば、紫上はそれを完全にではないけれども、具現した現実の女性像であったともいえる。「源氏は藤壺への思慕を、紫上にうつすことができた。むらさき（藤壺）の物語は、かうしてむらさきのゆかり（藤壺の姪）の物語とかはった。この二重うつしこそは作者の野心的な企であった」[註7]といわなければならないし、また物語は紫のゆかりの姿を多く語ることによって展開する。けれども、若紫の物語はその存在の源を藤壺宮に求めることをおいてはありはしない。そうであるからこそ、光源氏が若紫を初めて見出した時にも、彼の心中には藤壺宮の姿が鮮やかに描き出されている。

「さるは、限なう心をつくし聞ゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞおつる」

若紫をみて涙ぐむ光源氏の心の中には、藤壺への限りない思いがある。そして、このような光源氏の思いを語るときのほかに、物語は未だ藤壺宮について詳細に告げようとはしない。

「読者は藤壺の存在を、対象としてでなく、光源氏の心情を通して、ある力、ある影響力として感じとる。（略）ということは、すでに源氏物語の構成の秘密に触れたことになるのであろう。藤壺は光源氏の心の中で重要な人物であるのみならず、物語構成の背骨になる人でもあるのだ」[註8]

とは清水好子氏の説くところである。そのごとく、藤壺宮は、光源氏の思慕をかきたて、ついには密通という避けえない関係に入ることによって、自らが苦悩するだけでなく、その苦悩を女三宮・浮舟へと引きつがせた。そして、これらの女性とかかわる光源氏をはじめとする男性たち、ひいてはそれらに連なる人々――全「源氏物語」の舞台に生きる人間群像の生と死とに深くかかわる太い線の起点であり根源となった。藤壺宮によって始まる物語が、免れることのできない密通という出来事、その結果の悲劇的苦悩を軸にしているところに「源氏物語」を貫ぬく主題がある。そうであるかぎり、藤壺宮と光源氏は自ら課せられたその宿命的な出合いの道を進むより他にない。そのために物語は藤壺宮と光源氏との求めてはならないがゆえに、かえって引きつけられるどうすることもできない関係の緊迫感を伝える。そしてその緊張の極限に、恐れと不安を抱きながら読者が待ちつづけてきた決定的な出来事が実現するのである。

註4　風巻景次郎「輝く日の宮」
（日本文学三一年九月所収）

5　6　山岸徳平「藤壺宮」
（国文学三一年五月所収）

7　池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」（『望郷第八号所収）

8　清水好子「源氏の女君」

3

「藤壺宮、なやみ給ふ事ありて、罷で給へり。」

と、作者は突如として語り出す。すでに藤壺宮と光源氏とは出合い、藤壺宮は懐妊までしているというのである。筆を尽くして語らなければならないはずの事の経過をかえって物語は明らかにしない。恐るべき結末だけを端的に提示する。それによって事の重大さがより深刻に伝わるはずである。こうした作者の意図について、岡一男氏は、最初の密会が描かれていないのは、「帚木」巻で空蟬が光源氏に襲われて苦悶する場面を精細に赤裸々に描写したからだ、として、さらに

「さうする方が藤壺の宮をらうたくし、その苦悶をいっそう深刻に激しいものとすることは言ふまでもない。すなはち、空蟬が中の品の女だから、作者は遠慮なくその寝室に入り、源氏との私語を描きえたのであり、これに反して藤壺は上の品の上の女性なるが故にそれを朧写し、かつ彼女を懐妊せしめることによって懊悩を空蟬よりも深刻ならしめたのである」[註9]

と説いている。それに従いたいと考える。藤壺宮と光源氏とが造型されたときすでに胚胎させられていた宿命的ともいうべき関係がここに成立する。両者は求むと求めざるとにかかわらず、こうした悲劇的苦悩に身をゆだねなければならない。「藤壺の人間像は、物のあはれを知る人間にとって免れがたい宿命のような罪を負っているものであり、その限りで人間的な悲しみを負って」[註10]いるといわれる通りである。しかし、藤壺宮が背負わされた人間の悲哀はいかなる質のものであったのか。

「宮もあさましかりしを思し出つるだに、世とともの御物思なるを、さてだにやみなむ、と深う思したるに、いと心憂くて」

という藤壺宮の心情には、ふたたび光源氏との出合いをしはてたわが身への憂愁はみえるにしても、それが倫理的罪悪観にまで徹しているとはいいがたいのではなかろうか。ましてや、光源氏の場合には、藤壺宮の憂愁にもほど遠く、むしろ積極的に「かかる折だに、と、心もあくがれ惑ひて」、「暮るれば、王命婦を責めありき給ふ」というばかりで、そこには自らの犯した事柄に対する反省さえもみあたらない。とすれば、両者は結局自分たちの行為をどう考えていたとされるのか。

「世がたりに人やつたへむたぐひなくうき身を醒めぬゆめになしても」

という、源氏とふたたび密事を重ねたその後朝の歌には藤壺宮の真情がうかがえよう。「これ以降においても剃髪までの彼女の苦悩の発想はこれにつきている。彼女の悩みの対象はむしろ世であり人であった」[註11]といえるのではないか。藤壺宮の不安は、光源氏との関係が世人に露見し語り伝えられることにある。藤壺宮が後に出家するにあたって、この密事が重要な理由になっているけれども、出家が密通についての倫理的罪悪観をもととする厳しい自省からする苦悶の結果であると直ちにはいえない。このことについて吉沢義則氏は、「源氏と藤壺との情事は、貞操を以て律すべきものでなく、いはば官吏服務規律によって」判断されなければならないといって、

「出家は畢竟非行に対する懺悔ではあったが、藤壺の苦悶は、寧ろ（略）非行が噂の種になりはせぬかの懸念であった。貞操に対する道徳的悔悟も、瀆職に関する愧慚も、『あやまち』の一言で済ませて、ただ、その事実の人の口の端に上ることを恐れてゐたのであった。そこに、注意しなければならない時代性があることを忘れてはならないのである」[註12]

と指摘した。この見解のごとく、密事について藤壺宮は、帝に対して打ち消しがたい恐れを感じているとしても、それを道徳的倫理的につきつめているとは考えられない。藤壺宮の懊悩は、自らが犯した密通という行為そのものについての悔悟にあるとはみえない。

「外聞がわるいということを何よりも重大に考えたのは平安上層貴族のモラルでもあった」[註13]ということが藤壺宮の場合にも適用される。しかしそうはいっても、事柄はただ単純に外聞を恐れるということですまされる性質のものではない。藤壺宮の悲哀にも

「源氏物語の出離女性の一つの特質としてみるべきことは、古代萬葉集に於ける葛飾の真間手古奈や葦屋処女のように恋愛的優位にいたことである。しかし萬葉の娘子は二人或いは三人の男性に求婚せられて恐怖嫌悪を感じ、処女のままに若い生命を絶ったが、源氏の女性はもっと人間らしく実際的関係に陥り、苦悩困惑の末に救いを出離に求めた」[註14]

という発想がはたらいたにはちがいない。藤壺宮もまた、帝の限りない寵愛を受ける身でありながら、強いられて光源氏と結ばれ、両者の中にあって苦しまなければならない。けれども、それが「恋愛的優位」などと呼べるものではないことは事の経過が明らかにする。光源氏との逢瀬は宮にとっては「あさましかりし」ことにすぎない。光源氏は王命婦の助けを得て藤壺宮との逢瀬をえたのである。たとえ宮の心の奥底に光源氏への好意が秘められていたとしても、それは積極的に表明されてはならないものであった。ましてや、光源氏と密事を犯すなどということは思いもかけぬゆゆしいこと以外ではありえない。したがって、光源氏との出合いのくりかえしは、

「いと心憂くて、いみじき御気色」である。そうはいうものの、「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる御もてなし」であるとも語られる。そこに藤壺宮の内面の微妙な自己自身との抗争がうかがえる。拒絶しなければならない光源氏の懸想に、自らの意思に反してついに従ってしまった女性の身のもろさに藤壺宮の憂愁がある。藤壺宮は、「内に、しかとした道徳をもち、そうした態度をあくまでも保持しながら、いかんともなしがたい源氏との『あはれ』の中におちたのである。それはある意味で不可抗力のものといわねばならない」[註15]とみられる。光源氏との密事は、事柄の重大さにもかかわらず、ただなすべからざる罪悪と断ずるには、いかんともしがたい、とりわけ女の身にとっては避けがたいことではあった。当時の貴族社会に生きた女性にとって、一切は、「いと心憂き身」に由来すると考えるより他ない。心憂いとすれば、それは帝に背いて光源氏と犯した秘かな関係そのものではなく、そのような関係に入らざるをえなかったたつないわが身の程――自己の存在の全てがである。いうところの、「あさましき御宿世」の結果である。前世からすでに定められていたかのごとき避けがたい女の身の不自由からくる悲劇こそ「宿世」の実態であった。その「なほのがれ難かりける御宿世」によって、藤壺宮は悲劇的苦悩に陥らざるをえなかった、と考えるよりほかない光源氏との出合いであった。そのことにおいて、藤壺宮の、運命すなわち「宿世」の重圧にうちひしがれた悲哀は、同時代の閉塞的な藤原貴族社会の中に生きた女性の悲歎に連なっていく。「作者は女人なるがゆゑに負ふべき苦悩を、藤壺といふ高貴な女性において、深刻に、精密に、そして克明にかたらうとする」[註16]のであるといわれることである。仏教的宿命といわなければならないほど、女性に集約して背負わされた貴族社会における人間の苦悩に藤壺宮はおしひしがれた。それが、光源氏との密事という関係に投げこまれることによって、藤壺宮像が直面させられた課題である。

このような藤壺宮の心中の懊悩をあざやかに浮び上らせたのは紅葉賀と花宴とであった。

「朱雀院の行事は十月の十日あまりなり」

「二月の廿日あまり、南殿の櫻の宴せさせ給ふ」

紅葉賀、花宴巻それぞれの書き出しである。この冒頭の文章について、清水好子氏は、「この二つはいかにも公式的ないかめしい響きをもっている。いわば、漢文記録の翻訳調なのだ」[註17]とみて、このさながら史上の事実を告げるかのような口調によって、「延喜の聖代と桐壺帝の御代が重なり合う、それで作者のもくろみは成功したのである」[註18]と述べている。この指摘のように、ここには歴史的事実を物語の中に組み入れようとする「源氏物語」の方法が認められ

る。それとともに、もう一つの意図が存するといえるのではなかろうか。これまでの巻々は、全「源氏物語」の序章桐壺巻を除いて、すべて光源氏の私事に触れることから出発した。光源氏とそれをめぐる女性たちのさまざまの情愛を語ることを旨とする物語の本筋からして当然である。その物語の推移を貫ぬくものは、他ならぬ藤壺宮への暗くしかも目眩めく思慕であった。そして密事とそれゆえのおののきが語られてきた。しかし、帝その人はこうした事実を知るよしもない。藤壺宮たちは自ら悩み、わが身の内に帝への恐れを抱きつづけてきたのであった。最後に至るまで、帝から事の次第を問いつめられるということを物語は語りはしないのだが、いうならば物語の表現が、帝がつきつけるであろうところの叱責と同質の詰問を彼らに投げつける。巻頭の表現の「この短かさ、必要重大なことのみを述べる骨太さ、いかなる感情もまといつかぬ事実のみの宣言」[註19]の公式的ないかめしさは、それだけでもうその背後に厳として存在する帝を思わせつつ、藤壺宮と光源氏との内面に鋭く切り込んで彼らを責めたてることとなる。作者は、そのことをもまたもくろんでいたといえよう。したがって、紅葉賀の試楽が「上も、藤壺の見給はざらむを、飽かず思さ」れて行なわれ、その儀式の中心にある光源氏が讃美されることが、直ちに藤壺宮の「おほけなき心」を責めつけることになる。めでたさとはなやかさのきらびやかな舞台とはうらはらに、藤壺宮の内部には懊悩と不安とが満ちみちている。そして、藤壺宮の悲哀の高まりのうちに、「紅葉賀の盛儀の晴れがましさの後に、重くるしい冷泉院の出生の物語が用意されていた」[註20]のである。明と暗、喜びと悲哀のくっきりとした対照によって、密事に由来する皇子の出生という劇的な場面が設定される。ここに紅葉賀の語り口がある。

「この事により、身の徒になりぬべきこと、と思し歎くに、御心地もいと苦しくてなやみ給ふ」

この一文は、「この御産によって、きっと自分は死んでしまふに違ひない」[註21]という宮の嘆息と読みとるよりは、「宮には、秘密の関係がもれるのではないかと御心配になるのである。光る源氏との密事が世にもれれば、宮はたとえ生きていても、生ける屍となるであろう。それは『身のいたづらになりぬ』というべきありさまである」[註22]と理解することのほうが、藤壺宮の真情に迫りうるのではなかろうか。宮は出産によって秘密の関係があらわになるのが不安なのである。出産の期日が近づくにつれて藤壺宮の懊悩はきりきりにしぼりあげられていく。そしてついに皇子が出生する。藤壺宮が案じつづけたごとく、

「いとあさましう、めづらかなるまで写し取り給へる様、違ふべくもあらず」

という。そのために藤壺宮は「御心の鬼」――心の咎にいよいよ苦悩する。自ら犯した行為の悲劇的な結末をいやおうなく藤壺宮はみなければならない。そして、事情を知りえようはずのない帝の皇子に対する愛情が深ければ深い程、より深い悩みにわが身をさいなまれるのである。皇子を中に藤壺宮と光源氏が帝に対面したとき、

「宮は、理なくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地の、かきみだるやうなれば、罷で給ひぬ」

という両者の苦衷が記される。このように桐壺帝は藤壺宮たちにとって、「表面上何の発動なくして実は内奥的にこの二人の愛の前に、威怖の対象として厳存するのであった」[註23]と考えられる。その何事も関知しない満足と情愛に満ちた言動の一つ一つが藤壺宮たちの心の咎を想起させる。彼らは自らの犯した行為の結果を戦慄をもって受け取らなければならない。密事ゆえの藤壺宮の苦悩はここに極限に達する。皇子出生を頂点とする紅葉賀・花宴両巻は、藤壺宮の悲劇性の結集点として、宮の内面の葛藤を執拗に語りつづけたのである。

註 9　岡一男「源氏物語の基礎的研究」
10　重松信弘「源氏物語の構想と鑑賞」
11　野村精一「源氏物語における罪の問題――序説・藤壺の場合」（国語と国文学三十三年三月所収）
12　吉沢義則「『知』の平安婦人」
13　佐山済「源氏と藤壺」（国文学三十四年九月所収）
14　関みさを「源氏物語の女性――出離本願の面から見た――」（文学二十四年十二月所収）
15　青木生子「日本古代文芸における恋愛」
16　前出、池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」
17 18 19　清水好子「源氏物語論」
20　前出、重松信弘「源氏物語の構想と鑑賞」
21　池田亀鑑「源氏物語」（日本古典全書）
22　玉上琢弥「源氏物語評釈」
23　前出、青木生子「日本古代文芸における恋愛」

4

光源氏との密事の結果である皇子出生のために藤壺宮が悲歎と苦悩の深底にあるとき、物語の場面は一転する。

「院の御なやみ、十月になりては、いと重くおはします」

と桐壺帝の病いを伝え、さらにひきつづいて崩御が語られる。藤壺宮は皇子出生にまつわる悲哀の上に、庇護者桐壺帝の死という悲哀を重ねなければならないのである。

「十二月の廿日なれば、大方の世の中とぢむる空の気色につけても、まして晴るる世なき中宮の御心のうちなり」

陰欝な冬景色がそのままに藤壺宮の暗い心の内のありさまである。桐壺帝こそ自らが背いた人であり、そのために畏怖しつづけてきた人であったけれども、その死が過去の出来事を消し去ることはできない。密事の影をひきつぐ皇子が厳然として存在しているのである。予期せぬ帝の死が藤壺宮の置かれた状況を好転させはしない。それのみか、桐壺帝の死によって、わが身と皇子の地位についての重要な支えを失なうことになる。とりわけ、寵愛を争った大后の「いちはやき」心を思うといよいよ行末が不安である。

桐壺帝の死という不意の出来事は、直ちに権力の交替をひきおこす。光源氏・左大臣の没落、藤壺宮の失意、それと反対に右大臣一門・大后が進出する。そこに当時の藤原摂関制貴族社会の構造の反映をみることができる。そして、物語において、その宮廷社会の最も中心に比類ないものとして藤壺宮が存在していたのであってみれば、その地位を与えていた帝の死によって起った、栄光から敗退への落差はきわめて大きい。

「内裏に参り給はむことは、うひうひしく所狭く思しなりて、春宮を見奉り給はぬをおぼつかなく思ほえ給ふ。」

という記述が、困難になった藤壺宮の立場を端的に語る。

「藤原貴族社会の女性の中で、身分的経済的また精神的に安定した生活を、現在および将来にわたって継続しうる者は、皆無に等しい事実である。そしてこの不安・不定の根本原因は、藤原貴族社会――『世』――の構造に帰せられるであろう。つまり、『後見』としての男性（親であり夫であるところの）に依存することなくしては、生活を維持しえない藤原貴族女性の隷従性が不安・不定の根底をなしているのであろう」[註24]

という一般的な状況が藤壺宮像に写し取られている。そして、ここに成立する不安・不定の意識こそが、当時の貴族社会における人心の仏教への傾斜をうみだした根源であった。物語のこれまでの経過からみて、藤壺宮もまたそのような心情をもつべき共通の基盤に立っているといわなければならない。

しかしそうはいっても、藤壺宮の場合は、一般的状況との共通性のみで律することはできない。親なきあとの庇護者であった桐壺帝が死去した今、後宮社会において最大の支えがなくなって不遇を余儀なくされているとはいえ、後見としての光源氏は存在しているのである。そして問題は、唯一の後見たる光源氏が、「なほこの憎き御心の止まらぬ」ということにある。この進退きわまった困難さが宮の苦渋を深刻にしているのである。そこに、人間性の内実につきすすんで、その救済を計ろうとする「源氏物語」固有の課題が認められる。そのために、物語は藤壺宮をすぐさま出家の道に進ませることはしない。なおも、藤壺宮の内面を揺り動かすように、光源氏

との関係をふたたび舞台の前面に語り出すのである。

誤ちをふたたびくりかえすということは、自分は別としても、春宮のために必ずよくない事態が生ずるに違いない。それを避けるために、光源氏の懸想をおしとどめるべく加持祈祷までさせる。こうした藤壺宮の入り組んだ心中の葛藤をよそに、光源氏は、桐壺帝ゆえに抑えていた宮への思慕を、帝なき今、ほしいままにしようとする。そして、ついに光源氏は藤壺宮のもとにおしいる。そのとき、光源氏は、物語作者に「男」と呼びすてにして語られる。この一語の表現に、光源氏の暴挙に対する作者の、したがって読者たちの非難を読みとることができるのであろう。この光源氏の道理を無視した激情に対面させられることによって、藤壺宮の懊悩は限界に達する。頼みとすべき光源氏に対する隠しおおさなければならない自らの好意、皇子とわが身、光源氏をも守るために光源氏の情愛への拒絶、その葛藤と抗争の極みに、藤壺宮は「御胸をいたう悩み給ふ」のである。ここに、

「源氏の烈しい慕情に迫られ、みずからの理性との板挟みの苦しさのあまり、興奮して昏倒さえする藤壺の姿が描かれる。（略）いわば過不及ないといわれる藤壺という一代の麗人の精神の苦闘はよりうつくしく苦しいまでに描き出されている」[註25]

と佐山済氏の説くように、藤壺宮の内面の悲劇的な葛藤の極地が語られる。必ずしも、光源氏の情愛を拒絶するのが藤壺宮の本心ではない。光源氏のつきせぬ心の程を「さすがにいみじと聞き給ふふしも交るらむ」と、かすかではあるが、宮の心のうちにもある光源氏への同情を物語は明らかにする。しかし、あえてそれを抑えて「いとよう宣ひのがれる」藤壺宮である。かつての密事が露呈するのを恐れるがゆえである。それが、わが身と光源氏の罪過を避けるためではなく、春宮の身を守るためであるということに重点がおかれているところに藤壺宮の本意がみえる。桐壺帝の死後の全てを春宮の将来にかけているのである。そのために光源氏の情愛を拒否した。しかし、後見としての光源氏とは断絶してはならない、という矛盾対立するせっぱつまった位置に藤壺宮は追いつめられることになる。そうした藤壺宮の苦衷を、右大臣・大后方の圧迫がより厳しくする。「よろづの事ありしにもあらず変り行く世」は、「史記」が伝える戚夫人の故事――太后遂断戚夫人手足、去眼輝耳、飲瘖薬、使居厠中、命曰人彘――までも想起させる。たとえそれほどでなくても、「必ず人わらへなる事はありぬべき身にこそあめれ、など世の疎ましく過し難う思さ」れるのである。

桐壺帝死後の世相は、藤壺宮に、後宮を場とする政争の陰険さ、権勢の移行によって、中宮という地位さえ確保しがたいわが身の不安定さ、それら貴族社会の暗影部を如実に体得させた。この藤壺宮

の直面させられた現実は、物語作者の生きた藤原貴族社会の実態でもある。「人々の運命はいつも交昏と流転を余儀なくされ、見えざる手のうごかす微妙な変動にたえず曝されていたのである。かくのごとき不安な生活感情は、この見えざる手を認識しようとする歴史的意識の発達の基盤となった」[註26]という事情は、「源氏物語」の成立の基底にもある。不安・不定な世の中を生きることを役づけられていた人間群像、とりわけ、より不安定な生を強いられた女性たちは、自らどうすることもできないわが身の生涯を規定する運命、すなわち、「宿世」に思いを致さなければならない。貴族社会における栄達没落も全て宿世の結果と受けとられたのである。宮廷社会の最も中心に生きて、しかもその社会に根ざす悲哀を痛感させられた藤壺宮像は、宿世――その実、摂関制貴族社会の閉塞性――にうちひしがれた人間の文学的形象化であるといえよう。そして、当時の藤原貴族社会に敗れた求道者たちと同様に、仏道へと進んでいく。

藤壺宮は、「背きなむことを思し取る。」だがしかし、藤壺宮の道心の由来は、社会的地位の変動による不安にもあるとはいいながら、それのみに帰することはできない。藤壺宮にとって、何よりもまず安泰にしなければならないのは、わが身ではなく、春宮の地位をおいてはありはしない。そのために、世間に明らかになれば、わが身が指弾されるばかりではなく、春宮の地位そのものを危くする光源氏の情愛を断絶しなければならない。しかもその人を後見として頼みとすることによって、不安・不定を思い知らせる世の中に生きる道を模索しなければならなかった。物語が、こうした藤壺宮の困窮の解決の方途として与えたのが出家という道であった。したがって、藤壺宮出家の理由は、「彼女は源氏の君との物の紛れ以来、『いと心憂く、宿世の程思し知られて、いみじ』く悲しく思召すのであった。それに移り変る世の無常を歎く心も手伝って、『世の憂さに堪へず』して尼姿になった[註27]」ということもあるが、直接的には、「桐壺帝亡き後の藤壺は源氏からの白熱的な愛を拒否する道は全く出家より外になかった[註28]」ためであると考えられる。藤壺宮出家の理由についての諸説のうち知りえたものの多くは、このいずれかにまとめられるが、多屋頼俊氏は、「藤壺の宮わ冷泉院お懐妊して居られた時に、早く源氏の夢に予示せられた事の内容お知って居られて、その『たがひめ』にそなえて有徳の僧に祈禱おせしめられ、更に御自身も尼になって、身お謹んで修行おせられ[註29]」たとの見解を提示した。これに対して、すでに阿部秋生氏の、「この『ことのたかひめ』は、夢解きの『たかひめ』とは無関係に、むしろ源氏が除名になるといふ蹉迭に際会したことをさして、僧都が独自に使った一般的な意味でのことばであろう[註30]」という反論が出されている。さらに、藤壺宮が源氏の夢に予示せられた事の内容を知っていた、

とみられる証左となる文章が物語中に未だ発見できない。多屋氏の説に直ちには従いがたいゆえんである。

藤壺宮出家について、上述のごとく、二つの見解がある。一つは、わが身のつたない宿世とその結果としての密通という悲劇的苦悩に陥ったため、といい、他は、春宮のためという現世的顧慮に重きをおいてみる説である。この両説が出されるように藤壺宮出家には、自らの存在の根底からの不安・不定の意識の他に、多分に現世的な意味がある。この両方が分ちがたいままに為されたのが藤壺宮の出家であったけれども、比重は後者にかかっている。光源氏との密事があらわになることを恐れる藤壺宮の場合も、「『世のうき目』を遁れるためにも、その『世』を出ること――出家――が貴族の女性にとって、『救い』を意味した」[註31]ということがあてはまる。このとき、「世の中」は、世間一般というよりは、他ならぬ光源氏との関係に限定される男女の仲とみるべきである。それから逃れて、したがって、世間から批判されることなく、しかも、春宮、とりもなおさず宿命的ともいうべき自分たちの子を、光源氏その人と共同で擁立することが可能になる。このことに出家のより大きい意味があるとみなければならない。その限りにおいて、光源氏との出合いの悲劇性が和らげられる。それが藤壺宮にとっての現実的な救済とならぬはずはない。藤壺宮の出家は、したがって、現実への不満を含むとはいいながら、厭離穢土・欣求浄土に徹した求道心によるとはいいがたく、真の宗教的回心とみることはできない。出家という仏教的救済の形をとりつつ、その実は、貴族社会における救済、を求めたといえる。それどころか実際的な権勢獲得の基盤さえも与えた、といえるのではなかろうか。藤壺宮造型における出家の真相をここにみることができる。このとき、仏教思想は現実の絶対的否定のためにあるのではなく、現実を調和的に肯定する手だてとしてある、と思われる。そうであるならば、作者は藤壺宮を出家させたとはいいながら、そのことによって仏道帰依の方途を求めようとしたわけではない。そうではなくて、貴族社会の現実そのものの中心に、藤壺宮がより強固な地位を獲得する方法を探り出そうとする、物語の展開の必然性にもとづいてのことであった、と考えられる。仏教思想が「源氏物語」の形成に影響を与えていることは確かだが、藤壺宮についてみれば、その出家の要因の根本が仏教思想にもとづくものであるとすることはできない。そして、こうした藤壺宮像の形象を通して知られたごとくに、仏教の影響を受けつつ、しかもそれより自立したところにこそ、文学としての「源氏物語」の方法があるともいえよう。

藤壺宮自身、出家後、物語の伝統的約束にしたがって、光源氏の須磨流謫という出来事によって、失意の一時期を経てからは、冷泉

帝の即位・光源氏の再興とともに大きな政治的力を得る。「藤壺は、理想の恋人として物語の上にはすこししかあらわさなかった前半生に比し、後半は権力者としてたえず登場していた」[註32]といわれるほどの変身である。そして、その変容の分岐点に位置するのが出家であったといえる。藤壺宮像の現世的な変容の反面、この形象が背負っていた課題、女性に集約して背負わされる悲劇的苦悩は、女三宮、さらには浮舟へと引きつがれていって全「源氏物語」の主流を形成することとなるのである。

註24　田村円澄「日本仏教思想史研究　浄土教篇」
25　前出、佐山済「源氏と藤壺」
26　井上光貞「日本浄土教成立史の研究」
27　前出、竹野長次「源氏物語論考」
28　前出、実方清「悲劇的女性としての藤壺」
29　多屋頼俊「源氏物語の思想」
30　阿部秋生「源氏物語研究序説」
31　前出、田村円澄「日本仏教思想史研究」
32　前出、清水好子「源氏の女君」